

福岡市長賞

「社会保障制度に感謝」

福岡市立東住吉中学校 3年

長澤 祐太

小学5年生の時、私は生まれて初めて入院、手術を経験しました。それは四年前、習い事でほとんど休みのない中、唯一の休日で祖母宅で羽をのばしていたところ、ふとしたときに下腹部に痛みを覚え、近くの病院を受診しました。

診断結果は、泌尿器科系の稀な症例であり、そのまま直ぐに大学病院に移動し、緊急手術、入院することになったのです。それまでかぜもめったにひかなかった元気な私に急にこのような事態が起き、両親は、かなり動揺していました。それと同時に、どれ程の費用を工面しなければいけないのか、非常に不安な気持ちになったようです。

幸い、難しい手術ではなかったため、回復も早く、三日後には退院しましたが、入院費の精算後に、母が興奮してこう言ったのを今でも覚えています。

「幼稚園の時に医療費が無料になっていたあのピンクの医療証を覚えている？あなたは、ほとんど病院にかかったことがないから、めったに使うことがなかったけれど、あの医療証、小学生の入院まで助けてくれるんだって！本当にありがたいね。」

私が住んでいる福岡市は、当時、「小学校就学前までの通院費」と「小学生の入院費」を助成する「子ども医療費助成制度」があります。現在は、通院の対象が小学六年生までに広がっています。私は病院を受診することがなかったため、母はその制度を忘れていたようです。

こういった実体験から、私は、医療をはじめとする様々な社会保障制度がどのように成り立っているのか、改めて考えました。

これまで、消費税や自動車税、住民税等、両親が色々な場面で税金を納めていましたが私は、「何故、これ程までに、しかも高額な税金を支払わなければならないのだろう。」

と漠然と感じていました。しかし、その税金は、本当に困っている人、また、予期せぬ事態によって経済的な支援を必要とする人を助けるための財源であり、私達の当たり前の生活を支えるために不可欠なものであると気づきました。

人は、どうしても目に見える形でメリットを感じなければ、税金を払おうという意識が働かないと思います。しかし、病気や怪我は突然やってくるもので、誰しもこういった支援が必要となる可能性は十分にあります。したがって、他人事とは思わずに、また、今この時も助けが必要な人を支えることができていること、そして何より、不自由なく当たり前の生活ができているのも、様々な保障制度のお陰であることを理解し、国民一人ひとりが税金の重要性を認識すべきと考えます。